県立図書館だより

平成２０年１０月　　青森県立図書館報　第２号

毎月第2土曜日は「おはなし会」
毎月第4土曜日は「科学おはなし会」

当館の児童閲覧室内のおはなしコーナーにおいて、毎月第２土曜日には、読み聞かせボランティアと図書館職員による絵本の読み聞かせ、ブックトークを行う「おはなし会」を、毎月第４土曜日（１２月・３月を除く）には、毎月違ったテーマで、身近な科学についてのお話や実験・工作、本の紹介を行う「科学おはなし会」を開催しています。

どちらも、事前の申し込みや参加費は不要です。また、参加者には、カードとシールをプレゼントしています。ぜひお気軽にご参加ください。

本年度は、このほかにも小学生と保護者を対象とした講座等を開催します。

①「親子でチャレンジ！図書館の達人講座」
　開催日:10月26日(日)　事典類の引き方や図書館の利用方法を学ぶ。

②「親子で作ろう！豆本講座」
　開催日:11月9日(日)　親子で世界に一つだけの手作り本に挑戦する。

③「親子でチャレンジ！全国縦断クイズマラソン」
　期間:10月27日(月)～３月13日(金)
　　４７都道府県のご当地クイズをスタンプラリー形式で解いていく。

これらの講座等へ参加するには、申込みが必要です。
詳しくは当館ホームページ「こどものへや」をご覧ください。
　※ こどものへや（http://www.plib.net.pref.aomori.jp/top/kodomo/index.html）

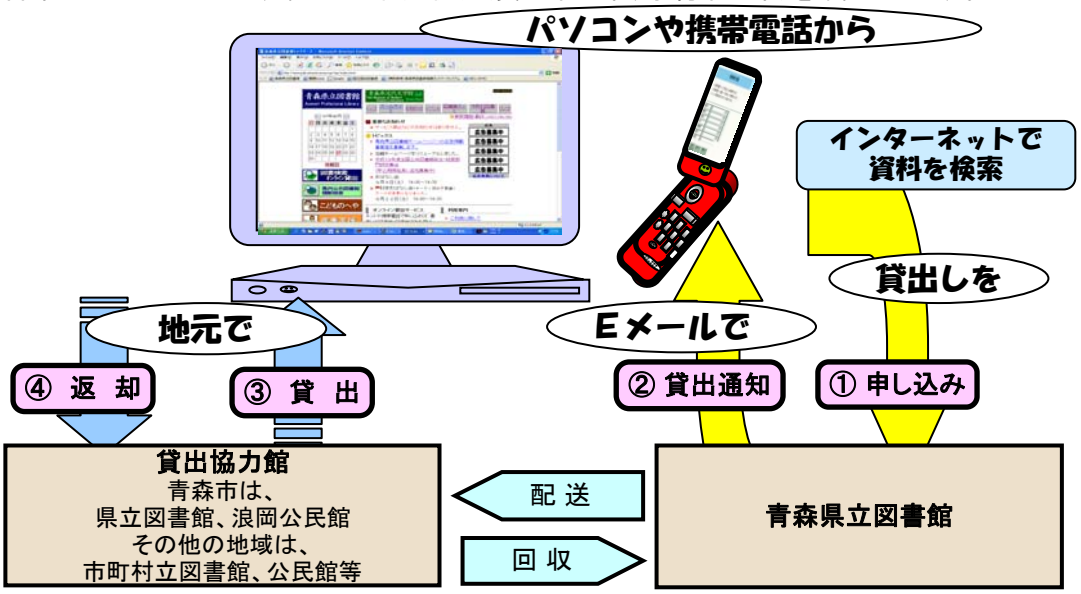
目　　次

「おはなし会」、「科学おはなし会」等の紹介…… 1
オンライン貸出サービスについて…… 2
こんなレファレンスがありました…… 3
子どもの本の紹介…… 4
郷土資料の紹介…… ５～８
近代文学館資料の紹介…… 9
カウンターから一言…… １０

オンライン貸出サービスについて

◆オンライン貸出サービスとは？

県立図書館の本をインターネットで検索し、貸出や予約の申込みができます。
貸出準備ができ次第、Eメールであなたのパソコン・携帯電話にお知らせします。
Eメール到着の翌日から、県立図書館や最寄りの貸出協力館で本を受け取ることができます。
県立図書館のホームページで、あなたの利用状況（貸出中の本、予約中の本）を確認できます。



◆オンライン貸出サービスを利用するには？

◎利用者カードが必要です（既に利用者カードをお持ちの方は、仮パスワードのみ必要となります）。

① 県立図書館カウンターでの申込み
来館の上、「利用者カード申込書」を提出してください。運転免許証・保険証など本人の氏名、住所を確認するための書類をお持ちください。

② 郵送での申込み
「利用者カード申込書」（当館HPよりプリントアウトできます）を県立図書館まで郵送してください。運転免許証など、本人の氏名、住所を確認するための書類の写しと290円分（配達記録郵便用）の切手を貼った返信先住所記入済みの返信用封筒を同封してください。（確認書類関係は全て返送します。）

※仮パスワードのみの場合は、住所等確認書類は不要です。郵送の場合、返信用封筒は80円分で構いません。

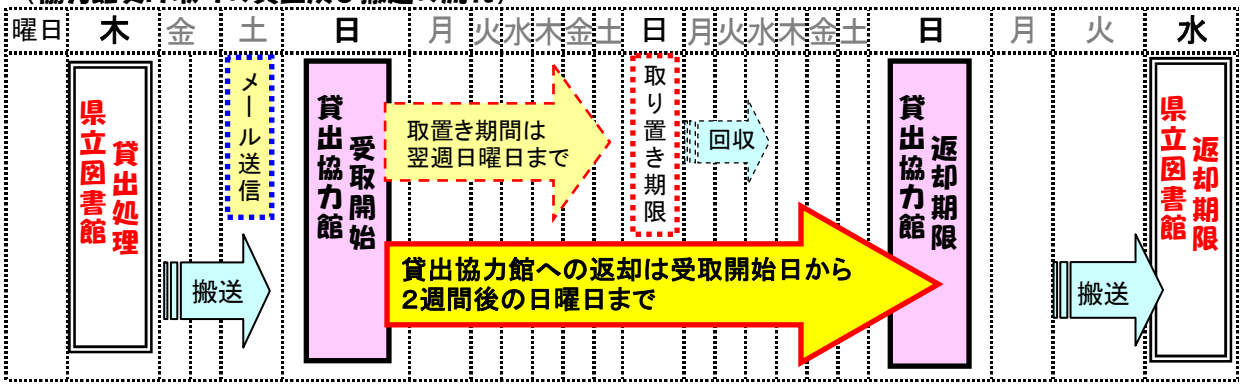
◎インターネット接続が可能なパソコン又はインターネット接続が可能な携帯電話、及び個人のメールアドレスが必要です。

◆貸出できる資料や冊数は？期間はどのくらい？

◎貸出できる資料は、図書資料です（雑誌・AV資料は対象外です）。一度に、5冊まで貸出できます。
◎貸出期間は、15日間です。

※貸出協力館で受け取る場合、貸出票に記載される貸出期間は21日間となっていますが、資料の搬送期間が含まれているため、ご利用になれるのは15日間です。この期間には貸出メールが届いた翌日から1週間の取り置き期間（貸出協力館で受け取ることができる期間）を含んでいます。15日間以上ご利用になりたい場合は、期間の延長手続きが必要になります（ただし、期間の延長ができるのは、次の方が予約していない場合に限ります）。

（協力館受け取りの貸出及び搬送の流れ）



◆返却先は？

◎本を受け取った貸出協力館（市町村立図書館等）、または県立図書館に返却してください。

◆問い合わせ先（利用者カード申込書送付先）

青森県立図書館　オンライン貸出サービス係
〒030－0184　青森県青森市荒川字藤戸119－7
TEL017－729－4300

こんなレファレンスがありました

（第２回）

参考・郷土室では、「探している本が、どこの図書館にあるのか知りたい。」「こんなテーマの本はありますか。」「こういう事柄や人物を調べたいが、どんな本がありますか。」などというレファレンス（質問）に、図書館資料等を使って、お答えしています。

そのたくさんのレファレンスの中から、毎回、事例を紹介していきます。

【質問】「八戸」「五戸」などの地名の「戸(へ)」の意味、由来を知りたい。

【回答】

「戸（へ)」の由来には諸説があり、特定できないため、代表的な説とそれが掲載されている参考資料を紹介した。

1　平安時代後期、南部氏が糠部郡（ぬかのぶぐん）を九つの郡に分け、それらを四つの門に分属させた「九ヶ部四門の制」(九ヶ部六十三村が協力して軍馬を育て、馬を献上する制度)にかかわる行政区域である一ノ部～九ノ部が転じて一戸～九戸となったとの説

2　平安時代の蝦夷平定の際に築造された城柵の柵戸（読み：さくこ、きのへ　意味：防衛施設や守備兵などの集落）に由来するとの説

3　鎌倉時代に南部氏が、領内に設置した「南部九牧」と呼ばれる９牧場の「柵戸」に由来するとの説　　ほか諸説あり。

【参考文献】

『七戸町史　２』(七戸町　1984)
『東北ふしぎ探訪』(伊藤孝博著　無名社出版　2007)
『青森県の歴史散歩』(青森県高等学校地方史研究会編　山川出版社　2007）他

このように、はっきりした回答が出ない質問については、幅広く資料を提供し、質問者自身がそれらの資料を手に取り、照らし合わせて調査できるようお手伝いをしています。

ちなみに、一戸から九戸までのうち、なぜ「四戸」がないのか？については、上記回答中にある「九ヶ部四門の制」時代には「一戸」から「九戸」まであった糠部郡が、寛永 11 年に、北郡、三戸郡、二戸郡、九戸郡の四郡に解体して「四戸」の地名が消え、江戸時代の郡制改革や明治・昭和の町村合併の際にも、「四戸」の町村名が復活しなかったため、といわれています。

●レファレンスは、電話・手紙・ＦＡＸのほか、電子メールでも受け付けています。

レファレンス申込み及び問い合わせ先
青森県立図書館　参考・郷土室
電　話　０１７－７２９－４３１１
ＦＡＸ　０１７－７６２－１７５７
電子メール　sanko@plib.net.pref.aomori.jp

子どもの本の紹介（第2回）

小説や随筆などには、文学賞や文化賞と呼ばれる多くの賞がありますが、児童文学にも、数々の有名な賞があり、毎年、話題を呼んでいます。

◎ 児童文学関係文学賞・文化賞 （2007年現在）

第38回講談社出版文化賞・絵本賞『ルリユールおじさん』（理論社）
第54回産経児童出版文化賞・大賞『牡丹さんの不思議な毎日』（あかね書房）
同賞・JR賞『オホーツクの十二か月』（福音館書店）
同賞・美術賞『ぼくのきもち』（クレヨンハウス）
同賞・産経新聞社賞『どこかいいところ』（理論社）
同賞・フジテレビ賞『未来のきみが待つ場所へ』（講談社）
同賞・日本放送賞『世界一おいしい火山の本』（小峰書店）
同賞・翻訳作品賞『ドラゴンキーパー』（金の星社）
第56回小学館児童出版文化賞『おじいちゃんは水のにおいがした』（偕成社）
『ケイゾウさんは四月がきらいです』（福音館書店）
第21回赤い鳥さし絵賞『本朝奇談　天狗童子』（あかね書房）
第29回講談社絵本新人賞『たこやきかぞく』（講談社）
第12回日本絵本賞・大賞／読者賞『おかあさん、げんきですか。』（ポプラ社）
日本絵本賞『ここが家だ　ベン・シャーンの第五福竜丸』（集英社）、『うさぎのさとうくん』（小学館）、『ホームランを打ったことのない君に』（理論社）
第48回講談社児童文学新人賞…該当なし。
第36回児童文芸新人賞『トモ、ぼくは元気です』（講談社）
第47回日本児童文学者協会賞『ハーフ』（ポプラ社）
同賞・新人賞『天山の巫女ソニン1』（講談社）、『冬をとぶ蝶』（てらいんく）
第31回日本児童文芸家協会賞『レネット金色の林檎』（金の星社）
第45回野間児童文芸賞『しずかな日々』（講談社）
第18回ひろすけ童話賞『なつのおうさま』（ポプラ社）
第17回椋鳩十児童文学賞『冬の龍』（福音館書店）
※ 出典：『出版年鑑　２００８　第1巻』出版ニュース社　2008（参考025ｼｭｯﾊﾟﾝﾈ(2008-1)）

これだけの児童文学賞がある中、2007年に小学館主催の「１２歳の文学賞」という全く新しい文学賞が加わりました。この文学賞と上記の数々の賞との決定的な違いは、応募資格が満12歳以下の小学生であることです。記念すべき第1回の大賞は小学6年生と小学4年生、2008年の第2回の大賞は小学5年生がそれぞれ受賞しています。現代の小学生が書く作品は、どれも夢や希望に満ちあふれ、空想の世界が繰り広げられたりします。第3回の受賞作発表は来年の3月となっています。

なお、第1回と第2回の受賞作品は、本として出版されています。

『１２歳の文学』小学館　2007（児913J　12ｻｲ）大賞ほか8作品収録

『１２歳の文学　第2集』小学館　2008（児913J　12ｻｲ(2)）同じく9作品収録

郷土資料の紹介（第２回）

青森県立図書館では、青森県に関する資料や青森県内で刊行された資料、青森県在住者・出身者の著作物等を郷土資料として積極的に収集し、永く保存するとともに、県内外の皆様に広くご利用いただいております。

このコーナーでは、当館所蔵の郷土資料の中から、普段は人目に触れる機会の少ない貴重な資料などをご紹介します。

今回ご紹介するのは、『プランゲ文庫　雑誌コレクション』です。

第二次世界大戦後、日本を占領した連合国軍総司令部(GHQ)は、1945 年秋から 1949 年 11 月にかけて日本国内で発行されたすべての出版物に対し、厳しい検閲を行いました。検閲のために集められた資料群は、その歴史的価値に着目したゴードン・W・プランゲ博士の尽力により、検閲制度終了後に米国メリーランド大学に移譲され、「プランゲ文庫」として同大学マッケルデン図書館に保存されました。

しかし、当時の印刷用紙が粗悪だったことによる資料の劣化が急速に進行しており、「プランゲ文庫」のマイクロフィルムによる保存事業が、メリーランド大学図書館と日本の国立国会図書館の協力により、現在も続けられています。

当館では、これまでにマイクロフィルム化が終了した「プランゲ文庫」の資料の中から、青森県内で発行された雑誌計 76 誌のマイクロフィッシュ（マイクロフィルムのシート）219 枚を購入・整理し、皆様にご利用いただけるようになりました。

76 誌の内訳は、警察・労働組合・青年団等の機関誌から文芸同人誌、中学校の校友会誌まで多岐に渡っています。このことは、GHQ による検閲が徹底していたことを物語ると同時に、物資不足と検閲という二重の困難に見舞われながらも自由な表現の場を求めて雑誌を作り続けた、当時の人々のバイタリティと開放感をうかがわせます。

敗戦直後の混乱と窮乏のさなか、復興へと立ち上がった当時の人々は、何を訴え、何を求めたのか―現在では入手が困難なこれらの雑誌は、当時の青森県とそこに生きた人々の様子を知ることができる、非常に貴重な資料となっています。

なお、この資料は、汚・破損の恐れがあり、また、閲覧するにはマイクロリーダー（写真右）という特殊な装置が必要なことから、貸出は行っていません。

ご覧になりたい方は、お手数ですが当館職員にお申し出ください。

青森県立図書館所蔵　『プランゲ文庫　雑誌コレクション』

	タイトル	出版者	出版地
1	茜	あかね吟社	黒石町(青森県)
2	青草	青草社	青森
3	青森アララギ	青森アララギ会	青森
4	青森美術	青森美術社	弘前
5	青森教育	青森県教職員組合	青森
6	青森湾海洋生物時報	東北帝国大学臨海実験所	[野内村(青森県)]
7	アスナロ	青森国土短歌会	青森
8	あゆみ	全逓青森郵便局支部	青森
9	暖鳥	青森俳句会暖鳥社	青森
10	道標	道標発行所	弘前
11	映画スナップ	映画スナップ社	弘前
12	月刊文化	月刊文化社	弘前
13	月刊民報	株式会社奥羽民報社	青森
14	月刊東奥	東奥日報社	青森
15	月刊読物	月刊読物社	黒石町(青森県)
16	銀河	三戸川柳社	三戸町(青森県)
17	八甲田山	八甲田山社	青森
18	光	弘前市警察署	弘前
19	ひらない	国立青森療養所療友会	西平内村(青森県)
20	北愁	水交会	八戸
21	北戸	三戸圏	三戸町(青森県)
22	北方の旗	大鰐文学サークル	大鰐町(青森県)
23	壱年	門文庫出版部	弘前
24	いのち	国立療養所大湊病院内緑林の会	[大湊町(青森県)]
25	ゐろり	ゐろり会	弘前
26	寂光	松涛社	青森
27	時鐘	国鉄労組野辺地駅連合分会	[野辺地町(青森県)]
28	抒情性	抒情性クラブ	弘前
29	海洋生物時報	東北大学臨海実験所	[野内村(青森県)]
30	上北週報	上北週報社	七戸町(青森県)
31	北の鈴	青森県教職員組合文化部	青森

32	孔版研究	金木町第一農業協同組合孔版研究会	金木町(青森県)
33	こけし人形	純文学研究会	弘前
34	鴿林	鴿林会本部	弘前
35	校友会誌	大鰐中学校校友会	大鰐町(青森県)
36	国原	国原社	八戸
37	緑	抒情性クラブ緑同人詩社	弘前
38	みなと	国鉄労働組合青森支部小湊分会文化部	[小湊町(青森県)]
39	民謡復興	抒情性クラブ日本民謡復興詩人社	弘前
40	陸奥	陸奥短歌協会	八戸
41	むつの子	青い森社	青森
42	むつのまもり	国家地方警察青森県本部警務部	青森
43	ねぶた	青森県川柳社	黒石町(青森県)
44	荷役のひびき	八戸港湾労働組合	八戸
45	音響	全逓青森電信局支部教育文化部	[青森]
46	プロレタリア	プロレタリア詩人社	弘前
47	雷魚	[雷魚会]	[能代]
48	黎明誌	南田中青年団黎明躍進会	尾上町(青森県)
49	Ren	日本社会党青森県連合会中弘支部文化部	弘前
50	労苑	五所川原労政事務所	五所川原町(青森県)
51	緑林	国立療養所大湊病院内緑林の会	大湊町(青森県)
52	療友	国立弘前病院患者自治会文化部	弘前
53	作報青森	農林省青森作物報告事務所	青森
54	さわら	さわら詩社	黒石町(青森県)
55	青鉄文芸	国鉄労組青森支部文化部	青森
56	川柳あけぼの	弘前川柳社	弘前
57	川柳みちのく	川柳みちのく吟社	黒石町(青森県)
58	川柳うき世	川柳うき世吟社	弘前
59	車影	国鉄労働組合青森支部青森検車区分会文化部	[(青森県)]
60	新青森	新青森社	弘前
61	進化	県立弘前高等学校生物クラブ進化編集部	弘前
62	白樺	国鉄青森支部古間木分会文化部	大三沢町(青森県)

63	東北便り	東北便り社	三本木町(青森県)
64	東北会議	東北会議社	青森
65	東北詩壇	東北詩壇編集所	弘前
66	ともしび	黒石女性文化乃会	[黒石町(青森県)]
67	灯	灯同人社	嘉瀬村(青森県)
68	透星	東青病院従組文化部	青森
69	十和田	十和田発行所	大鰐町(青森県)
70	蕾	蕾同人会	弘前
71	つどい	全逓信労働組合青森電話局支部	青森
72	浮彫	青森美術社	弘前
73	うたげ	抒情性クラブうたげ同人社	弘前
74	忘れな草	八尋昭和十三年度卒業生同期会	八戸
75	座標	抒情性クラブ座標同人詩社	弘前
76	全体医術	日本全体医術研究会	弘前

近代文学館資料の紹介（第2回）

葛西善蔵　第一創作集・全集第1巻

身辺に題材を取った作品を多く描き、「私小説の神様」と称えられた作家、葛西善蔵（1887～1928、弘前市出身）。「文芸の前には自分は勿論、自分に附随した何物をも犠牲にしたい」という不退転の決意をもって創作に臨み、「芸術の苦行者」として大正文壇で注目された作家でもあります。

善蔵は、1887（明治20）年に弘前市の松森町で生まれ、碇ヶ関村(現平川市)で少年時代を過ごしました。その後、２年に渡る北海道での放浪生活を経て、1905（明治38）年に上京、聴講生として哲学館大学や早稲田大学に籍を置きました。同人雑誌「奇蹟」に処女作「哀しき父」を発表したのは1912（大正元）年のことです。

今回は、当館で常設展示している善蔵関連の資料から２点を紹介します。

『子をつれて』の外函

『子をつれて』

1918（大正7年）３月、善蔵は「早稲田文学」に「子をつれて」という作品を発表し、これが出世作となりました。借家から追い立てられ、長男、長女とともに夜の街をさまよい歩いたという体験に基づいて書かれた小説です。翌1919（大正8）年３月には、表題作のほか11編を収めた単行本『子をつれて』が新潮社から刊行され、この第一創作集によって、善蔵は新進作家としての地位を確立しました。

『葛西善蔵全集』第1巻表紙

背表紙

改造社版『葛西善蔵全集』第1巻

1927（昭和 2）年、かねてから肺を患っていた善蔵は、療養の費用を得るため、過去に出版した本の版権を売却することを考えました。交渉の結果、「当社から葛西善蔵全集を出版する」という条件の下に改造社が月に 200 円ずつ支給してくれることとなり、健康が衰えゆく中、善蔵は収録作品の自選を行いました。病床に第 1 巻が届けられたのは 1928（昭和 3）年 7 月 18 日のことで、刊行を見届けた善蔵は、5 日後の 23 日に息を引き取りました。41 年間の生涯でした。

※　10月11日から11月24日まで企画展示室において、企画展「葛西善蔵　没後80年―或る自己小説家の軌跡―」を開催します。ぜひ御来館ください。

カウンターから一言（第２回）

前回は、「コインロッカー」と「閲覧室内専用の図書収納バッグ」をご紹介しましたが、今回は、「忘れ物・落とし物」と「貸出期間の延長」についてです。

忘れ物・落とし物

図書館では、どんな時に忘れ物や落とし物をしてしまうのでしょうか。検索用端末を利用した時、手洗いを利用した時、財布や利用者カードを取り出した時などが多いのではないでしょうか。

忘れ物や落とし物については、一般閲覧室入口の左側に展示していますので、お心当たりの方は、一度ご確認ください。なお、返却された本にも、その本の内容に関するメモ書きやしおりが挟まれていることもあります。お気を付けください。

貸出期間の延長

貸出期間の延長を希望される際には、期限切れ前の連絡をお願いしているところです。事前に連絡がないと、予約待ちの方にご迷惑をおかけることになります。延長のお申し出は、返却期限の３日前から受け付けておりますので、ご協力をお願いします。

編集後記

ホームページを活用しての「県立図書館だより」第２号は、レファレンス事例や子どもの本、郷土資料、近代文学館資料の紹介などの連載のほか、オンライン貸出サービスと子どもの読書関連事業をご紹介しました。

読書の秋、一冊でも多くの「心に残る本との出会い」をお手伝いできたらと考えております。

お近くの市町村立図書館や県立図書館のご利用をお待ちしております。

（広報委員会）